書評

李進熙著
広開土王陵碑の研究

井上秀雄

本書は日本古代史研究に基本的な問題を提起したものである。近年、日本古代史研究を東アジア史の視点で再検討する必要が認められはじめた中で、従来古代史研究の原点の一つとされてきた広開土王陵碑文を、抜本的に再調査すべきことを提言している。

著者李進熙氏は在日朝鮮人考古学者として朝鮮高校・朝鮮大学で教をとっていた。また、『考古学雑誌』などで解放後の朝鮮考古学の発展を日本の学界に紹介するとともに、『朝鮮文化と日本』をあらわし、古代から近世にいたる日本文化に、朝鮮文化がいかに大きな影響を与えたかを、豊富な事例と明快な解説とで、広く日本人に訴えてきた。著者の精力的な研究活動は考古学・古代史研究者の中で早くから注目されてきた。

著者に私が強い関心を持ったのは、一九六四年の朝鮮史研究会第二回大会のときからである。この大会は「日朝関係史の史的再検討」をテーマに掲げ、その古代史部門では、前年朝鮮民主主義人民共和国で発表された金錫亨氏の「三韓三国の日本列島内の分国について」をとりあげた。ここで村山正雄氏の報告「古代の日朝関係について――金錫亨教授の論文を批判する――」に続いて、著者が代表質問のかたちで、金錫亨氏の論考を支持する立場で反論した。ここでの討論はたんに古代史研究者だけでなく、近代史家からの発言もあって、各方面からの関心をよんだ。この大会では問題が広範囲にわたったため、広開土王陵碑文が中心的な問題点とならなかった。しかし二、三年後に、著者が同碑文の研究に打ち込んでおられるとの話を聞いた。ちょうどそのころ、私もこの大会を契機に、任那日本府と倭との問題にとりくんでいたので、おそらく、著者もこの大会の結着を碑文の解明に求めておられるのかと推測していた。

一九六六年朝鮮民主主義人民共和国で朴時亨氏が『広開土王陵碑』をあらわされた。翌年同書の抄訳紹介を、私は永島暉臣慎氏とともに『朝鮮研究年報』第九号におこなったが、前掲の金錫亨氏の論考ほどは反響がなかった。その理由は種々あるが、当時の日本古代史研究は、敗戦後の学界の動向であった日本国内史の傾向を一層顕著に示し、対外関係は戦前の成果で事足りとしていたからである。さらにいえば、敗戦後の日本ではそれ以前の朝鮮史研究が個人の努力のいかんにかかわらず、当時の帝国主義侵略の渦中にあったとする反省に力点が置かれたため、日本の中では朝鮮史研究が事実上放棄されていた。そのため、朝鮮史関係は敗戦前の日本人の研究によるか、解放後の朝鮮の研究成果によるかしかなかった。しかしこの両者とも敗戦後の日本の現実とは異ったものであるだけに、日本の学界でとうぜんそれらを再検討しなければならなかった。

一九七〇年朝鮮史研究会第七回大会で、中塚明氏が「近代日本

史学史における朝鮮問題――とくに〈広開土王陵碑〉をめぐって――」を報告されてから、朝鮮侵略の中枢参謀本部による同碑文の紹介・解読の問題がとりあげられ、日本古代史研究は近代日本の朝鮮侵略と結びついて行われていたことが指摘されるようになった。

本書は著者李進熙氏が永年にわたって古代日朝関係史の再検討を日本の学界に要請してきた一つの成果である。六三年の金錫亨氏の論考に端を発し、七〇年以後の日本の研究動向に即したものといえよう。すなわち、アジア侵略を意図した参謀本部が国民にその侵略主義の正当性を認めさせ、支持させるために、この広開土王陵碑文を改竄した疑のあることを実証しようとしたものである。

本書の構成は大別して、六章からなる本文と多数の文献・図版・釈文・拓本などの資料編からなりたっている。文献など資料編は今後の研究に大きな貢献をもたらすものであるが、ここでは本文の概要を述べておこう。

第一章　広開土王陵碑研究の歴史では、一八八四年以前に、日本の参謀本部から中国に派遣された酒匂景信中尉が鴨緑江を遡り、この碑のある輯安で碑文の雙鉤加墨本を入手し帰国すると、参謀本部では多数の漢学者を動員して、その解読にあたらせた。このとき、酒匂中尉の碑文のすりかえや誤写があって正確に読めなかった。日清戦争のときはじめて本格的な拓本が日本軍によってとられた。参謀本部はこの拓本とさきの雙鉤本とを比較し、さきの雙鉤本の誤りをおおい隠すため、碑面に石灰を厚く塗って、原碑文の書体に似せた同じ大きさの文字を書き込んだ。これがいわゆる「石灰塗付作戦」で、一九〇〇年ごろと推定される。一九〇四年以前に碑文の一部を訂正する第三次の加工が行われた。そうして今日一般に知られている拓本は、すべていわゆる「石灰塗付作戦」以後に拓出されたものである。ところが、今日までの研究者はこのような碑文の偽造を看破できず、ただ金石学の常識にしたがって、字画の明確な拓本をより古いものと判断し、不幸にも偽造された碑文によって、広開土王陵碑や初期日朝関係史を研究してきたというのが本書の基本的な命題である。

さらに、明治政府の朝鮮侵略政策にともない、日本での対外関係研究がいずれも「任那」問題をとりあげ、この偽造された碑文と『日本書紀』とが、古代の日朝関係を示す史実とし、『三国史記』など朝鮮の史料の対倭関係記事を信ずべからざるものとして拒否した。そうして著者は「要するに、確立期の日本の近代史学が、どれほど日本の朝鮮植民地支配を歴史的に正当化するのに奉仕したかは、何人も否めないところであろう」と結んでいる。

第一章では日本・中国・朝鮮の研究を、それぞれの時期でとらえているが、その中でとくに注目をひくのは、今西竜・黒板勝美両氏の諸説を重視していることと、戦後の日本および朝鮮の碑文研究を重視していることとである。今西・黒板両氏の業績は碑文の現状を正確に伝えたことであり、石灰の剝落部分などから原碑文を見いだしたことである。これは現地調査を行う者として当然のことと考えられるが、この当然の発見がいかに困難であるかは、一九六三年朴時亨氏等の調査でもこの点が明確に指摘されないことからも推測できよう。

初期の中国人学者の研究では、同王陵碑が一八八〇年にこの地

の農民によって発見され、翌年から次第に研究分野が拡大され、本格的な拓本も一八八七年から拓出されたという。しかし、中国で広く知られるようになったのは一八八九年の李雲従氏の拓本であった。中国で最初に出版されたこの碑の研究書は、一八九五年の王志修の『高句麗永楽太王古碑歌』であり、これは資料編の最初に収録されている。この研究書は一八八七年の拓本によっているといわれる。その後の中国の研究が日本の参謀本部での研究をまとめた『会余録』第五集や「石灰塗付作戦」後の拓本を基礎にしているため前書ほどの価値がない。一九〇八年フランスのシャバンヌの研究が発表され、広開土王陵碑の存在をヨーロッパに伝えているが、これまた第三次加工以後のものである。

敗戦後の日本の研究では「記紀の記事にたいするきびしい批判の立場というよりも、広開土王陵碑文や七支刀の銘文をもって、記紀の記事を合理的に解釈する方向でなされたといっても過言でなかろう」としている。碑文を見ることのできなくなった日本での研究は、碑文の解読をほとんどあきらめていた。

そのなかで、水谷悌二郎氏の「好太王碑考」(『書品』第一〇〇号、一九五九年)を注目し、その成果を高く評価している。「水谷氏の論文でもっとも注目すべきことは、各時期の拓本をこまかく比較検討する一方、従来研究者が殆んど疑いをかけなかった碑文五〇数字について、石灰のもっとも剝落した拓本(水谷氏はもっとも古いものと推定している)をもとにして訂正したことであろう。その当否はともかく、水谷氏が釈文や拓本を数多く集め、そこにあらわれる碑文の違いを古文献を引いて訂正する従来のやり方を批判するとともに、釈文や拓本の資料的批判を行なっていることは、広開土王陵碑の研究の研究を大きく前進させたというべきであろう」といっている。研究方法ではこの論文を拡充強化し、近現代史との関連を求めたところに、本書を位置ずけることができよう。

解放後朝鮮での最初の研究は「一九五五年に発表された鄭寅普の〈広開土境平安好太王陵碑文釈略〉であろう」。この論考の成果は古代日朝関係で、もっとも重要な箇所としてきた辛卯年の記事を読みかえたことである。これを発展させたものが前掲の金錫亨氏ならびに朴時亨氏などの解読である。これらの論考はたんに碑文の解読の問題だけでなく、敗戦後の日本の研究になお皇国史観の残滓があることをきびしく批判したものである。私もその問いかけには賛成であるが、碑文解読についてはなお承服しえない。この点についてはすでに他で論じているのでここでは省略する。ただ本書に即していえば、資料第一の王志修氏の二つの論考でもそのような読み方をしていない。「高句麗永楽太王碑歌攷」では「碑文以百残新羅旧是属民為倭所破王率水軍往討攻取五十八城」と注記している。王志修氏の解読を絶対視する必要はないにしても、「石灰塗付作戦」以前の拓本によった論考であり、日本の朝鮮侵略政策を支持する必要のない立場にあった人の見解として尊重しなければなるまい。

第二章　広開土王の時代と碑の現状でも種々の問題を提起している。まず『三国史記』と碑文とを比較して、「広開土王陵碑文には、高句麗と燕との関係についての記事が全く見当らない」とされている。『三国史記』は末松保和氏の指摘のように、中国史料を重ずる立場であり、この碑文が広開土王の業績を賛美する立

場であることから、この差異が生じたのである。このようなことを手掛りに、この碑文の性格が一層明確にされなければなるまいし、後世の編纂物である『三国史記』も、その編纂意図を含めた性格の追究なしには、広開土王の時代を解明することはできないと思う。

これに続いて著者は「そこ（『三国史記』）に記された対倭関係の記事を無視してしまい、『日本書紀』の記事だけを〈合理的〉に解釈することによって、朝日関係史を組立てるのは片手落ちであるといわねばならないであろう」といわれる。私も古代日朝関係史を研究する者として、たんに賛意を表するというよりは、むしろ、日本での研究の欠陥として痛感しているところである。また、このことは本書の随所にあらわれ、著者が日本の古代史研究者にもっとも強く訴えたいと考える点でもある。

著者は『三国史記』の広開土王の条に対倭関係の記事が全くみあたらないことから、この碑文にあらわれた倭関係記事を「石灰塗付作戦」や第三次加工で改竄された疑をもっておられる。その点については第六章で詳しく論及されている。ここで提案されているように、この王陵碑に付着した石灰を除去し、碑面に残された碑文の解読から再出発しなければなるまい。しかし『三国史記』では、広開土王条だけでなく、高句麗本紀に倭や倭国の名称はみられず、わずかに、倭山の地名が残されているだけである。私はすでに『三国史記』・『三国遺事』の倭についても論及しているので、批判を仰ぐ立場ではあるが、この碑文とは別に解明しなければならない。さらに遡って、倭をはじめて使用する中国の諸文献についても、平安時代以来の伝統を固守して、倭を大和朝廷のこととするのは原典の解釈をそこなうものである。倭と日本とは明瞭に区別して使っている。このような用法についても再検討しないかぎり碑文の正当な解明はできないのでないかと思う。

この点についてはしばらくおくとして、この章の終りに、石灰が剝落して「しだいに原碑面が露出しはじめた。……碑面には、こんにちでもまだ石灰が広範囲に残っている」と述べられている。資料編の写真を素人目でみるかぎり、内藤旧蔵写真および一九一八年撮影の写真では、著者の解説にみられるような石灰の厚化粧が明瞭に認められる。一九一三年および一九三五年撮影の写真では、石灰塗付で消された縦線が明瞭にみられる。石灰の付着していることは文字や縦線にも明瞭にみられるが、文字を石灰の上に造字したらしいところは、石のかどや破れ目の部分を中心としており、かなりの部分は造字できるほど石灰が残っていないように思われる。再言するが、これはあくまでも素人の感想で、精査された著者に反論するものではない。ただ一九六三年に現地調査の結果を報告した朴時亨氏著の『広開土王陵碑』でさえなお満足しない著者の一徹さは敬服に値するし、本書の趣旨にも反するが、徹底さを欠く私の立場からいえば、やはり著者の釈文を望みたいところである。

第三章　碑の再発見と雙鉤本、拓本の作成は、すでにふれた碑の再発見の時期や、最初の雙鉤加墨本や拓本の作成の時期について具体的な考証がなされている。この部分は著者に教えられることのみで、疑問を提示する余地もない。

第四章　酒匂雙鉤加墨本とその解読作業では、一九世紀に日本で広開土王陵碑文が解読され、古代日朝関係史の骨組みが確立さ

れたことをといている。一八八四年、参謀本部の酒匂景信がこの碑文の雙鉤加墨本を持ちかえり、これによって最初の釈文が作られた。そうしてその釈文を基礎に、菅政友・那珂通世・三宅米吉の三氏があいついで論文を発表した。そうして「広開土王陵碑文によって、倭＝大和政権の〈朝鮮出兵と朝鮮の南部経営〉を動かしがたいものとする主張は、日本ではすでに一八九〇年代に確立したわけである。そして、こんにちにいたる四分の三世紀にわたって、この碑文は、〈疑う余地のない朝鮮側の金石資料〉として、『記・紀』の拡大解釈に利用され、〈任那日本府〉説の定説化だけでなく、日本の中期古墳や古代史の研究までも規制してきた」ととかれている。この説にも私は全面的に賛意を表したい。私はかって「任那日本府」を解明しようと志したとき、このような重大な問題を直接とりあげた論考のないのに驚いた。また、倭の問題でも同様で、何故、倭を日本とし、大和朝廷にあてなければならないのか、正面からとりくんだ論考を見ることができなかった。古代史研究の解放といわれた敗戦後の日本の学界でも、一六八八年、松下見林の『異称日本伝』で倭の五王が記紀の天皇名に比定されて以来、その呪縛からみずからを解放した研究者が何人いたであろうか。

おそらくこのようなことは日本古代史研究に志す者であれば、強弱の差こそあれ、だれもが感ずることであろう。そしてその解明を志した人も少なくなかったと思う。にもかかわらず研究史の表面にあらわれないのにはいくつかの障害が考えられるが、一つは本書のように、自分の見解との相違を越えて、克明に関係論考を収録しないためである。また菅氏らが戦後の古代史研究まで規制するのでなく、独立不羈の精神で新たな文化を創造するためにはじめたはずの歴史研究が、時流に流され、学界の権威におされ、定説への挑戦さえ渋りがちになるのは、我々研究者の側に主たる責任があると思う。

この最初の碑文解読が、参謀本部によって行われ、それも単なる偶然でなく、次章で説かれるように、参謀本部の戦略的意図によって、組織的活動の一端であったことが明らかにされた。この点はさきにふれたように、中塚・佐伯両氏の先行の論考をさらに深め、資料の上からこのことを実証されたのは、本書の今一つの中心的な業績である。このことは、明治時代に、たんに軍閥だけでなく、もっとも時流に超然としていたと考えられる学者・研究者までもが「学問」という名を借りて、朝鮮侵略政策に奉仕してきたことを、あますところなく明らかにしたといえよう。

第五章　参謀本部によるいわゆる「石灰塗付作戦」を、前章とともに考察したい。ここで「碑文の解読作業が参謀本部で行われたことまでひたかくしにした」とされる。しかし前章をみれば、一八八九年六月に書かれた中村伯実氏著の『高句麗古碑徴』は、一九〇三年一二月刊行の中国の栄禧氏著の「高句麗永楽太王墓碑讕言」に、はやくもその書名や著者名が記されている。私はこの碑文解読作業がある程度秘密裏に行われていたかも知れないが、むしろ、この作業に参加した人たちは恥ずべき侵略行為の先駆をになっているとは考えなかったのでなかろうかと思う。むしろ、国家有用の事業に参加し得たことを名誉としていたのではなかろうか。とくにこの段階では参謀本部が国家必須の、しかも中核的機関として国民の興望をになっていたところである。ここでこの

碑文の解読が進められていることを恥ずべき行為として隠すべき理由はみあたらない。著者は「石灰塗付作戦」の準備と考えているようであるが、この点に関しても私は疑義を残さざるをえない。一九〇七年にこの広開土王陵碑を日本に持ち帰えろうとして、輯安県知事の反対にあって中止したことは、同碑文の雙鉤本を最初に持ち帰ったことや、その解読作業を参謀本部で行ったことなどとともに、いずれも資料が残存している。ところが「石灰塗付作戦」と第三次加工とは、いまのところ直接的な資料がみあたっていない。私は参謀本部の作為とする可能性を否定するものではないが、他に石灰塗付を行った者もいることは認めざるをえない。

私は朝鮮侵略政策の一環として、参謀本部が「石灰塗付作戦」を行ったとすれば、拓工が衣食の資を得るために資料改作を行ったことよりはるかに大きな社会的害悪を流したものと思う。しかし拓工たちの改作にも、たんなる個人の趣向でなく「墨客騒人」を喜ばせるためであった。これらの「墨客騒人」は参謀本部よりの使命をおびた者でなく、その時代の体制に率先して身を投ずる者であり、みずからは時代を先どりするといって、時代に迎合する人たちでなかっただろうか。私は著者のいう「石灰塗付作戦」が実証されることを心から望むが、それによって、当時の研究者も、今日の研究者も免罪符を得たわけではない点を強調しておきたい。

第六章　広開土王陵碑文の問題点では、「小松宮」拓本を重視すべきことと、最初の雙鉤本の誤りや、これをおおい隠すための石灰塗付、および碑文の倭の記事の読み方、およびこの部分の碑文の誤りなどを追究している。そうして、最後に、古代日朝関係史の研究分野では、先学の業績に安住し、朝鮮の研究者の問いかけには容易に耳を借さない「このような姿勢のなかに、かつての侵略的皇国史観の残滓が根強く残っている」と。また「広開土王陵碑にたいする朝・中・日三国学者の共同調査と共同研究は、こんにち、初期朝日関係史の正しい位置づけのためにも、緊急の課題といわねばならない」と結んでいる。

著者のこの提案もきわめて重要であるが、私はこの問題を解決するため、さらに、日本の中で中国史や朝鮮史が一層発展しなければならないと思う。

第二に、不確な資料の多い古代史では、文献史学内部でも、関連分野との総合でも、ややもすると確実な根拠を探求することを避け、他の研究成果に安住してしまう傾向がある。このような傾向を排し、研究者自身が責任を持つ気風が生じなければなるまい。そのためにはまず史実とその上にたつ理論の追求、とくに、基本となる諸問題をこの際再検討することが必要であろうと思う。

（菊判・本文二二二頁・資料編〈文献・写真・釈文・拓本〉・一九七二年十月・吉川弘文館・三〇〇〇円）

（大阪工業大学教授・[redacted]）